

二〇一三年度 卒業論文

# 『唯信鈔』について

L101501

田中 好三



# 目次

序論	1
本論	2
第一章 『唯信鈔』について	2
第一節 聖覚について	2
第二節 書誌	3
第三節 『選択本願念仏集』との関係	5
第二章 仮名法語について	6
第一節 仮名法語とは	6
第二節 浄土教の仮名法語	8
第三節 『唯信鈔』の表現の特色	9
第三章 『唯信鈔』の思想	11
第一節 本願観	11
第二節 念仏観	15
第三節 信心観	20

結論 . . . . . 24

【註】

【参考文献】

## 序論

唱導家、聖覚は、天台僧として活躍するかたわら、法然に浄土教の教えを受けた。正式の弟子とは呼べない面もあるが、漢文の『選択本願念仏集』（以下『選択集』という）における専修念仏等の考え方について、『唯信鈔』を世に出した。その『唯信鈔』について、親鸞は、主として関東の門弟たちを教化する資料として、自ら何回も書写したうえで、御消息の中で、それを読むように何回も勧めている。<sup>1</sup>

親鸞はまた、聖覚（と隆寛）を「よきひとびと」<sup>2</sup>（『浄土真宗聖典』七四三頁、以下『註釈版』という）と讃仰し、註釈書『唯信鈔文意』を著している。この冒頭には、題名である「唯信鈔」について解説がある。題名そのものを解説するのはきわめて珍しいことだが、この「唯信」の語に敏感に反応したのであろう。それによると、『唯』はただこのことひとつといふ、ふたつならぶことをきらふことばなり。『信』はうたがひなきところなり、すなはちこの真実の信心なり、虚仮はなれたるころなり（『註釈版』六九九頁）とあって、「唯信」とは、疑うことなくただ一つを信じる「真実の信心」であると解して、その共鳴ぶりを示している。

そのほか、『尊号真像銘文』に、「この本願のやうは、『唯信鈔』によくよくみえたり」（『同』六四四頁）とあり、さらに、『無量寿経』（以下『大経』という）、龍樹、聖徳太子等の銘文と同等に「聖覚法印表白文」の註解（『同』六六七頁）があるなど、親鸞の聖覚への傾倒がよくうかがえる。

このように親鸞が高く評価した仮名法語である『唯信鈔』には、どのような魅力があったのか、その内容について、特に、その本願観、念仏観、信心観について明らかにしたい。あわせて、聖覚がどのような目的で、この

『唯信鈔』を世に出したのかを探ってみたい。

本論

## 第一章 『唯信鈔』について

### 第一節 聖覚について

聖覚（一六七〇―一二三五）は、信西（藤原通憲）<sup>3</sup>の孫、藤原澄憲（一二二六―一二〇三）の子である。父の澄憲は、天台唱導の一派を創始した人である。比叡山で天台教学を学び、竹林院の里房である安居院に住んだ。そのため、安居院法印と呼ばれた。唱導家として名をなし、その説法は多くの人の心をとらえたという。叔父や甥にも名を成した僧がたくさんいて、僧侶として格式のある家系の生まれである。

聖覚は、父と同じく比叡山竹林院で修学し、安居院に住して唱導家として活躍した。父と同じく安居院法印と呼ばれた。そして、延暦寺の探題に登りつめるなど、学僧として第一人者であった。あわせて、後鳥羽院の側近であり、寵児であった。聖覚の名は、『明月記』などにしばしば登場するので、よく知られていたことがわかる。<sup>4</sup>また、彼の法話等に格別に多くの聴衆が集まったという記事が『沙石集』にある。<sup>5</sup>さらに、「耳を驚かす説法」をしたことが記されていて、説法名手であったことをうかがわせる。<sup>6</sup>

浄土教思想は、天台宗の僧としてその教学から学んだと想像されるが、法然に師事してさらに深め、承久三年（一二二二、五五歳）に『唯信鈔』を著わした。法然の門下には、幸西、隆寛、証空、弁長（聖光）、信空などが

いるが、法然は、聖覚と隆寛への信望が厚かったことが『明義進行集』に記されている。<sup>7</sup>

一方、『尊号真像銘文』には、「然我大師聖人 為釈尊之使者」（『註釈版』六六八頁）とあって、聖覚にとって法然は「わが大師聖人とあおぎたのみたまふ」お方である。わが師匠と位置づけている。元久元年（一一二〇四）、比叡山から法然とその一門に対する糾弾があり、法然は『七箇条の制誠』を制定した。それに、法然以下百九十名（『西方指南抄』では二百余名）の署名がされているが、聖覚の名はない。だから、聖覚は、いわゆる弟子と位置づけるには少しはみ出るところがあり、法然のよき理解者であって、法弟子といえることができる。

親鸞と聖覚との交流は、法然門下時代だけではなく、親鸞が京都を離れた後も何らかの形で続いていた。『唯信鈔』の自筆書写の一本には、親鸞がまだ関東にいた寛喜二年（一一三〇）五月二十五日（親鸞五十八歳）に「かの草本真筆」（『註釈版』一三五六頁）によって書写したと記されている。親鸞は、寛喜二年以来この書を何度も書写し、東国の門弟に下したが、さらに、建長二年（一一五〇）『唯信鈔』に引用している漢文にあたる部分をひろって註釈した『唯信鈔文意』を著わしている。また、『親鸞聖人正明伝』『親鸞聖人正統伝』には親鸞の吉水入室は聖覚の手引きによると伝えている。親鸞の六歳年長である。

## 第二節 書誌

本鈔は源空（一一三三〜一二二二）の滅後九年、承久三年（一二二一）に聖覚が著したが、こんにち彼の自筆本を知ることができないとされている。『浄土真宗聖典全書二』（以下『浄真全二』）の解説によれば、親鸞は生涯

に少なくとも八回は『唯信鈔』を書写しているとある。また、同書の付録年表によれば、親鸞によって書写されたものが少なくとも六回あげてある。すなわち専修寺所蔵の信証本と平仮名本、大阪府真宗寺蔵本、京都府常楽寺蔵本、専修寺蔵顕智書写本、恵空写伝本である。

このうち、信証本の奥書には「草本云」・「草本曰」とあり、このことから、親鸞は、聖覚自筆の草本から「寛喜二歳仲夏下旬第五日以彼草本真筆愚親鸞書写之」と、寛喜二年（一二三〇、五八歳）五月二十五日に初めて書写したことが知られる。六十歳を過ぎてからの帰洛から考えれば、まだ東国に在住していた時の書写である。聖覚の自筆本が現存しないため、原作が漢文か和語かは不明であるが、ここでは「和語」であったという立場をとる。それは、「親鸞書写之」とあって、格別に漢文から和語に変更したという記述がないこと、また、管見によれば、先行論文には、漢文でかかれていたという論がないからである。

この卒論は、『註釈版』によったので、「信証本」である。『浄真全二』によって、各異本との違いを点検したところ、以下のような結果であった。対校本は、「本願寺蔵本」「平仮名本」「岐阜県照蓮寺等本（断簡）」「真宗法要所本」である。

違いは五種類であった。第一は表記上の違いで、一つは、「仏―ほとけ」「人―ひと」のように漢字と仮名の違いである。また、「むすばむ―むすばん」「ゆ―へ―ゆゑ」のように、仮名同士の違い、「遍数―返数」のような漢字同士の違いである。これらには意味の違いはまったくない。第二は言葉の違いで、「さえぎる―さいぎる」「ねぶる―ねむる」の二例で、訛りの違いのようなものであった。また、「いふとも―いえども」「（因縁の）ゆへに―を



もて」という例も意味の違いはない。第三は欠落で、「又一なし」「今生にも一今生も」「かの業力がつよく一かの業つよく」等の例があり、意味はほぼ同じである。第四は文法上の違いで、「(信心決定) しなば一せば」「信ぜずは一信ぜぬは」の二例であった。「決定しなば」と「決定せば」は、順に「決定したならば」「決定すれば」の意味になるので、大きな違いはない。「信ぜずは一信ぜぬは」も、違いはない。第五はそのほかの場合で、「(うたがひを) なさて一なさく」がある。これも、ほぼ同じ意味である。また、「(ただ) あさく一ふかく」がある。これは全く逆の意味になっているが、文脈からは、明らかに「あさく」とするのが正しい。以上のように、異本によって異なる表現はいくつかあったが、いずれも、解釈上大きな違いがないと言える。

### 第三節 『選択本願念仏集』との関係

『唯信鈔』は、『選択集』の二門章・二行章・本願章・三心章のそれぞれの記述に順じた構成や展開をしていて、聖覚が『選択集』のある部分に光をあて、和語でわかりやすく説明したものであることがわかる。

聖浄二門は、『選択集』の二門章・二行章・本願章を受けており、聖道門と浄土門、諸行往生と念仏往生について述べている。

専雑二修は、同じく二行章を受け、専修念仏の勝れていること主張している。また、『選択集』には、大乘と小乗の違いを詳しく述べ、さらに、浄土三部経や『浄土論』等の内容を紹介しながら、浄土門へ導く内容が展開されている。一方『唯信鈔』は、現実の具体的な行である、真言、法華だけを例にあげて、浄土門のすぐれた様子を

説いている。<sup>10</sup>

三心は、三心章を受けて、至誠心、深心、回向発願心について解説している。『選択集』は、善導和尚の提唱した五正行から説きはじめて、助行を解説し、さらに五雑行を解説して、ようやく称名の正しさを説いている。『唯信鈔』は、諸行往生と念仏往生を対比し、さらに、専修と雑修を単純化して解説し、専修念仏を勝れたものと説く。十念は、本願章を受けて、明確に十遍の名号をとなえることであると述べている。

漢文で書かれた『選択集』を和語で分かりやすく記述したものということができるが、複雑な部分や七祖の引用などは省略して、庶民向けに工夫している様子がうかがえる。したがって、『選択集』が費やしている膨大な内容をそのまま書きしるしたのではなく、同じ内容の部分でも省略しており、また、浄土宗独立に関する内容をはじめ、「利益章」「特留章」「撰取章」「四修章」などは書かれていない。これらを省いたのは、世の人々に専修念仏についてわかりやすく、いわば入門編とでもいうべき内容にして、簡潔にまとめたためだと思われる。

## 第二章 仮名法語について

### 第一節 仮名法語とは

「仮名法語」とは、仏教の教えを漢文ではなく、和語で分かりやすく説いた高僧などの言葉を指すものである。「仮名」とはいえ、仮名で書かれたものに漢字が交じっているものも「仮名法語」と呼ぶ。「法語」とは、仏教の道理によって説かれたすべての教えをいう。

日本に仏教が伝来して以来、儀式用にも学習や学問のうえでも、漢文の経典を用いてきた。仏教伝来当時の日本の有能な僧侶たちには、漢文はほとんど抵抗なく読んだであろうが、庶民にとっては極めて難しいものだったに違いない。だから、僧侶は、庶民に分かる言葉を使わねばならない。ここに、法語が生まれる必然性があった。法語は、庶民にむかって、仏教の教えを説く書き言葉である。これが仮名法語である。そういう意味では、仏教の布教活動において、大きな革新であったということが出来る。具体的な仮名法語が『日本古典文学大系』に載せられている。<sup>11</sup>

明治時代まで、正式な文章は漢文であり、いうまでもなく、平安・鎌倉時代は、表記の上では「漢文の時代」である。しかし、一方で、平安時代の女性による物語や日記は和文で書かれた。漢文とは無縁な一般庶民にとって、和文は、理解でき親しむことのできる表現スタイルであった。<sup>12</sup>したがって、仏教が貴族や武家を中心とした身分のある人々から、庶民の仏教へと広まる時代状況の中で、右のような仮名法語が登場したのは、必然性があったと言える。

法然の『選択集』は漢文である。これは、南都北嶺の僧侶たちに伝える意味があり、仮名法語は、広く庶民に伝える役割を果たした。そういう意味で、この『唯信鈔』は、漢文の『選択集』の中心思想を和文で解説したものと位置づけることができる。特に「専修念仏」の意義を簡潔に、しかも平易に述べた仮名の聖教として、親鸞は珍重したにちがいない。東北の門弟たちに盛んに勧め、自ら書写を何度もしている様子から結論づけられる。

ところで、『唯信鈔』は、親鸞が愛読し、書写したこともあって、御消息にしばしば登場するが、『歎異抄』に

も引用されている。<sup>13</sup>

## 第二節 浄土教の仮名法語

仮名法語は、民衆を仏教の世界に導く一つの方法として発展してきた。中村元氏は、仮名法語の流れを、第一段階では梵語をカナガキにし、第二段階では接続詞や助詞などをカナガキにして、第三段階で純和文をもって述作するとして、源信（九二四～一〇一七）の『横川法語』、真盛の『奏進法語』などが登場するとした（『日本古典文学大系』八三巻「月報」二頁）。浄土教における仮名法語という点に絞ってみると、たとえば、『註釈版』には、『尊号真像銘文』『一念多念証文』『唯信鈔文意』や和讃など、親鸞の一連の著作があがっている。時代が下がると、『歎異抄』『口伝鈔』『御文章』などがあげられている。この『唯信鈔』の前後あたりから親鸞までの時代に限ってみると、『横川法語』『一枚起請文』『後世物語聞書』『一念多念分別事』『自力他力事』等があげられている。ここでは、『唯信鈔』の同時代のものを一瞥しておいて、『唯信鈔』の特徴をさぐってみたい。源信の『横川法語』（十世紀末～十一世紀初）は、自らが漢文で著した『往生要集』の要点を、和文で解説したもの（四〇〇字程）である。内容は、「厭離穢土」「欣求浄土」のための発菩提心と念仏往生を説いている。これは、ちょうど、『選択集』の要点を『唯信鈔』として和語で著した関係に似ている。聖覚はそれを倣ったのかもしれない。法然の『一枚起請文』（十三世紀初）は、人間に生まれた喜びと凡夫たる私たちは念仏によって疑いなく往生する旨（約三五〇字）を表現したもので、入滅直前に著したものである。『一言放談』（十三世紀終～十四世紀前半）は法然、明

遍、慈心など三四人の中世念仏行者、遁世者を編集したもので、誰かの書き下ろしではない。浄土門の信仰が平易な言葉で書かれている。聖覚も列を連ねている。『後世物語』（主として三心について。約四五〇〇字）『一念多念分別事』（一念か多念かについて。約一七〇〇字）『自力他力事』（自力、他力を比較して他力を勧める。約一五〇〇字）については、その成立時期は不明であるが、『唯信鈔』と同時代のものではないかと思う。隆寛の作とされている。これらの特徴は、ある特定の問題点に絞っているところにある。

このような仮名法語の中にあつて、『唯信鈔』はひととき輝いている。それは、約一万字に及ぶ著作であること、これだけで他を圧倒している。また、内容の点でも、専修念仏を説いているが、それは、本願、念仏、信心などの視点から総合的に説いていて、しかも、次節で述べるように、庶民に分かりやすい例を盛り込んで、親しみやすい工夫がされているのである。

### 第三節 『唯信鈔』の表現の特色

表現上の特徴とは、次のようなものが挙げられる。大きくは、まず「比喩法」で、対句法、反復法、反語法、倒置法などがある。聖覚の場合は、特に、比喩法と対句法が顕著に見られる。しかし、対句表現は、漢文や漢詩の伝統的な技法であり、きわめて普通におこなわれているので、ここでは、比喩法を中心に、その表現の特長と表現効果等について、触れておきたい（傍線は筆者、以下同じ）。

法蔵比丘が厳しい修行を積む中で、見事な浄土を建設するが、その文脈で、次のような箇所がある。

二百一十億の諸仏の浄土のなかより、すぐれたることをえらびとりて極楽世界を建立したまへり。たと

へば、柳の枝に桜のはなを咲かせ、一見の浦に清見が関をならべ、たらんがごとし。『註釈版』一三四〇頁)

とあつて、「柳の枝に桜の花」というたとえは、奇抜な発想であるが、現実にはあり得ないことをたとえることで、人間の思議の及ばない、不可思議な浄土の世界を表現したものとみることができ。また、有名な景勝地をあげて、極楽浄土の華麗な姿を目の前に浮かぶように描いている。これらは学生や知識人のためではなく、一般民衆を讀者と想定して、わかりやすい例をあげて、ありありとイメージできるような描写方法にしたのである。

つづいて、念仏の専修、雑修を説くなかで、専修をすぐれたものと結論づけた後、以下のように続く。

そのゆゑは、すでにひとへに極楽をねがふ、かの土の教主(阿弥陀仏)を念ぜんほか、なにのゆゑか他事を  
まじへん。電光朝露のいのち、芭蕉泡沫の身、わづかに一世の勤修をもちて、  
『註釈版』一三四三頁)

と、述べてあり、人間の命を具体的なものにとえることで、一瞬のいのち、すぐに壊れてしまうか弱い命を見事にイメージさせている。きわめて文学的な表現とすることができ、唱導家としてのおいにする表現である。

このほか、専修とはどういうことかの説明にも、

みやづかへをせんに、主君にちかづき、これをたのみてひとすぢに忠節を尽すべきに、まさしき主君に親し  
みながら、かねてまた疎くとほき人にこころざしを尽して、この人、主君にあひてよきさまにはんことを  
求めんがごとし。  
『註釈版』一三四四頁)

とあり、また、三心を説く場面で、

わがためにいかにもはらぐるかるまじく、ふかくたのみたる人の、まのあたりよくよくみたらんところををしへんに、「そのところにはやまあり、かしこにはかはあり」といひたらんをふかくたのみて、そのことばを信じてんのち、また人ありて、「それはひがことなり、やまなしかはなし」といふとも、いかにもそらごとすまじき人のいひてしことなれば、のちに百千人のいはんことをばもちゐず、もとききしことをふかくたのむ。

〔註釈版〕一三四七頁～一三四八頁

とあつて、いずれも身近な例やエピソードをいれて、誰が聞いてもすぐにわかる、唱導家らしい表現である。また、聖覚の文章力は、この後、きりりと締まった文章で締めくくるところにもある。<sup>14</sup>

比喩表現の特徴は、きわめて身近な、民衆にとってわかりやすい例をもつて説いていることがわかった。一歩間違えると誤解されかねない比喩もあるが、イメージとしてわかりやすく、人々の胸に落ちていくことを中心にたとえを用いたということができる。同時に、誤解をうけないようにするためであろうか、主張するところはきわめて理路整然と説いていることもうかがえる。

### 第三章 『唯信鈔』の思想

#### 第一節 本願観

聖覚は、法然の『選択集』に順じて、仏道を聖道門、浄土門に分け、浄土門に諸行往生と念仏往生を立てて、それぞれ自力の往生、他力の往生と名づける。末代の機に適う所の浄土門を説く。そして、自力の往生について

は、「行業もしおろそかならば、往生とげがたし。かの阿弥陀仏の本願にあらず。」(『註釈版』一三三八頁)と述べて否定し、念仏往生については、「阿弥陀の名号をとなへて往生をねがふなり。これはかの仏の本願に順ずるがゆゑに、正定の業となづく。ひとへに弥陀の願力にひかるるがゆゑに、他力の往生となづく。」(『同』)と述べて、称名念仏によつて救われるが、それは、阿弥陀仏の本願に信順することであり、往生のまさしき業であるという。「他力の往生」と明確に説いている。続いて聖覚は、「そもそも名号をとなふるは、なにのゆゑにかの仏の本願にかなふとはいふぞ」と自問しながら、本願についての論を展開する。

阿弥陀如来が、まだ法蔵比丘であつたときから説き始めて、法蔵菩薩が、なぜ気の遠くなるような長い期間にわたつて修行したのかというと、それは、「一切の衆生を救済する」という覚悟からきている、と述べている。「不孝のもの」「文句しらざるもの」「慳貪・破戒のともがら」「瞋恚・懈怠のたぐひ」(『同』一三四〇頁)といった凡夫のために、「五劫」の間修行したのである。

その結果、四十八願をおこすことになるが、「まづ第十七願に諸仏にわが名字を称揚せられんといふ願をおこしたまへり。」(『同』一三四一頁)と、第十七願に注目する。そして、この直後に、

名号をもつてあまねく衆生をみちびかんとおぼしめすゆゑに、かつがつ名号をほめられんと誓ひたまへるなり。しからずは、仏の御こころに名譽をねがふべからず。諸仏にほめられて何の要かあらん。

(『同』一三四一頁)

と、続けている。全ての衆生を救うために、あえて、諸仏からの讃嘆をもとめたのであり、それ以外の理由は微



塵もないというのである。つまり、全ての諸仏が阿弥陀仏を称讃することで、一切の衆生を救う阿弥陀仏の存在理由、その必然性、真实性を明らかにした願ということが出来る。この第十七願に注目すべきであると主張しているのである。これは、明らかに第十七願の諸仏による名号讃嘆が、衆生の称名の導師としての役割を果たしていることを論証するものである。

つづいて、こうした理念を、『五会法事讃』を引用してまとめている。つまり、

如来尊号甚分明 十方世界普流行 但有称名皆得往 観音勢至自来迎  
〔同〕一三四一頁

と、引用して補足・証明している。如来の尊号があらゆる世界に流布している、ということは、諸仏、大小の聖人、凡夫に「南無阿弥陀仏」の尊号が知れ渡り、ただ称名することによって往生できるとするのである。

第十七願をこのように位置づけておいて、次に第十八願について言及する。

さてつぎに第十八願に念仏往生の願をおこして、十念のものをもみちびかんとたまへり。・・・名号はわづかに三字なれば、盤特がともがらなりともたもちやすく、これをとなふるに、行住坐臥をえらばず、時処諸縁をきはらず、在家出家、若男若女、老少、善悪の人をもわかず、なに人かこれにもれん。〔同〕

とあって、本願の位置をどつしりと定める。「さてつぎに」というつなぎは、第十七願の前提があつてはじめて第十八願がおこされたというのである。したがって、「十念のもの」とは、第十八願における「乃至十念せん」と行ずる者をさして、この称名は第十七願によって今まさに真実の証を得ていて、その連動の結果として読むことができる。聖覚は、明らかに、第十七・十八を別々のものではなく、第十八願は、第十七願を根拠としてなり

たっているとみていたと考えられるのである。

そして、この願は、あの「盤特」でさえ称えることのできるわずかに「阿弥陀」の三字である、どんなに下の下であっても「たやすく」称えられる、しかも、時、所、人を選ばないというのである。「えらばず」「きはらず」「もれず」と歯切れよく否定文を重ねて、「なに人かこれにもれん」という反語で締める文脈から、聖覚の感嘆の声が聞こえてくる。文章としても、巧みな比喻と歯切れのいい文体は見事で、唱導家の技をのぞかせている。

法然は、阿弥陀仏の四十八願を「選択本願」と名づけている。選択に取捨と撰取の二義があり、法蔵菩薩は二百一十億仏土から取捨選択して四十八願を建立し、阿弥陀仏となったとする。第一願から第四十八願まで、捨てるものと取り入れるものを選び完成したのである。したがって、選択本願とは、如来の願心であることがうかがわれる。また、四十八願いずれも選択本願であるが、その結論は、凡夫の往生を誓った第十八願こそ選択本願であり、本願中の王本願であると説く(『七祖篇』『選択集』一一二―二八頁)。

しかし、法然は第十七願に全く目が向いていなかったかというところではない。『三部経大意』『登山状』には、第十七願について触れている。

その名号を往生の因としたまへることを一切衆生にあまねく聞かしめんがために諸仏称揚の願を立てたまへり。第十七の願これなり。第十七願に、「十方世界の無量の諸仏、ことごとく咨嗟してわが名を称せせずといはば、正覚をとらじ」という願を立てたまへり。

(『法然上人全集』三一頁)

とあって、つづいて、

次に十八の願に「乃至十念若不生者不取生覺」とたてたまへる。

〔同〕

と、十八願について述べる。また、『登山状』にも触れていて、<sup>15</sup> 第十七願の諸仏が阿弥陀仏を称揚する諸仏称名の意義を認めており、その方向の視点を持っていたことは確かである。しかし、すでに述べたように、聖覺における第十七願と第十八願の関係にまで深くは論じていない。

それにしても、こうした第十七願については、主著の『選択集』には述べられていないので、第十八願を王本願とする立場であったことがあらためて知られるのである。その意味では、聖覺は法然より、より一層明確に第十七願を重視したといえることができる。

## 第二節 念仏観

日常的に「念仏」と言えば、「ナモアマダブツを称える」ことを指すが、浄土教の流れにおいて、「仏を念ずる」とは、仏を憶うので憶念する、仏の形像を観するので観念・観想することも含まれる。『論註』（「八番問答」）で、第十八願の「乃至十念」をどう解釈するかについて、曇鸞（四七六〜五四二？）は、憶念と称念の二意をみている。<sup>16</sup> 善導（六一三〜六八一）は、「乃至十念」を称名念仏であると明示した。<sup>17</sup> 第十八願の誓いを「我が名を称せよ」という称名念仏の誓願として解釈したのである。

この流れを受けて、法然は、『選択集』の冒頭に、「善導和尚、正雑二行をたてて、雑行を捨てて正行に帰する文」〔『七祖篇』四六三頁〕と題して、『観経疏』を引用している。第十八願の誓いは、善導において称名念仏と

定めている点を継承しながら、併せて、専修こそがその真の意味であることを説いた。そして、『選択集』で「二門章」「二行章」「本願章」と展開する中で、いよいよ称名念仏一行の専修をあきらかにしている。これを『選択集』の結びの「三選の文」において、正行を説いた。<sup>18</sup> 正行は五種の正行であるが、助行を傍らにして称名を正定業として選ぶのである。しかも、この称名念仏は、仏の本願に依るから必ず往生を得ると説く。このように、称名念仏が往生の行業となる根源は、阿弥陀仏の選択本願にあるとする。法然は、「南無阿弥陀仏」と御名を称することよりほかに往生の行業はないと明らかにするが、それは帰するところ阿弥陀仏によって選ばれた他力の称名行を説くのである。

聖覚は、『選択集』の二門章を承けて、凡夫たる者は、末法の世にあつて時機相応の教えは、浄土門しかないとするのである。そして、浄土門には「ふたつのすじ、別れたり。一つには諸行往生、二つには念仏往生なり。」（『註釈版』一三三八頁）として、まず「諸行往生」について言及する。<sup>19</sup> 諸行によって往生を遂げないことはないが、自力の往生であるから、行業がおろそかになったら、往生できないことになる。あの阿弥陀仏の本願に救われるのではないのである。この末世の衆生は凡夫であるゆえに、自力往生は無理である、というのである。このように述べたあとで、

二つに念仏往生といふは、阿弥陀の名号をとなへて往生をねがふなり。これは、かの本願に順ずるがゆゑに、正定の業と名づく。ひとへに弥陀の願力にひかるるがゆゑに、他力の往生と名づく。（『註釈版』一三三九頁）と、展開する。念仏往生は本願他力によって救われるのであつて、これは万人 possible の道であると説いている。

さらに、名号を称えることがどうして仏の本願にかなうかについて論を展開していく。すなわち、「そもそも名号をとらふるは、なにのゆゑに」（『同』一三三九頁）と問いをたてて、阿弥陀如来が法蔵菩薩の時の五劫思惟の果てに浄土を建立したが、それは、自力の行によつて救うのではなく、そうした行のできない凡夫たる全ての衆生を浄土に導くためである。そして、以下のように述べて、念仏の意味を説く。

これによりて、一切の善悪の凡夫、ひとしく生れ、ともにねがはしめんがために、ただ阿弥陀の三字をとらへんを、往生極樂の別因とせんと、五劫のあひだふかくこのことを思惟しおはりて、まず十七願に諸仏にわが名を称揚せられんといふ願をおこしたまへり。  
（『同』一三四〇頁）

とあつて、聖覚は、名号を三字（阿弥陀）とする。この三字にこそ、一切の善悪の凡夫を救済する因があるとするのである。すでに法然が「それ、三字の名号は少なしといへども、如来の所有の内証外用の功德万徳恒沙の甚深の法門をこの名号の中におさめたる」（『法然上人全集』「三部経大意」三八頁）と説いている。それを承けている。聖覚は、このわずか三字については、

盤特がともがらなりともたもちやすくこれをとなふるに、行住坐臥をえらばず、時処諸縁をきらわず、在家・出家、若男若女、老少、善悪の人をもわかず、なに人かこれにもれん。  
（『註釈版』一三四一頁）

と、否定形を並べて、「いつでもどこでも誰でも」称えることのできる普遍的な法であると述べている。これらの説明をしたあと、『五会法事讚』を次のように引用して、「このころか。これを念仏往生とす。」と結んでいる。

彼仏因中弘誓 聞名念我総迎來 不簡貧窮將富貴 不簡下死与高才 不簡多聞持淨戒 不簡破戒罪根深

但使回心多念仏 能令瓦礫變成金

『註釈版』一三四一頁

とあつて、法蔵菩薩が願を立てて、念仏すれば一切の衆生を救うという。「不簡」を繰り返すことで、「すべての凡夫」にあてはまる普遍の真理であることを示している。そして、その凡夫（瓦礫）はついには仏（金）となるとして、実に本願の不可思議な力を比喩的に表現しているのである。

次に、聖覚は、念仏往生の各論を展開する。念仏往生の門には、専修・雑修の二行があるとして、

専修といふは、極楽を根が不心をおこし、本願をたのむ信をおこすより、ただ念仏の一行をつとめてまつた  
く余行をまじへざるなり。・・ただ弥陀の名号をとなへ、ひとへに弥陀一仏を念ずる、これを専修と名づく。

・雑修といふは、念仏をむねとすといへども、また余の行をもならべ、他の善をもかねたるなり。この二  
つのなかには、専修をすぐれたりとす。

『註釈版』一三四三頁

と、述べて、この二つを明確に区別し、専修念仏をすぐれているとする。

法然や親鸞も比叡山で念仏修行をしてきたように、念仏は各宗派において、なされてきた行法である。各宗派には本行がありながら、余行として念仏をするのである。しかし、聖覚は、念仏以外はすべて余行としてしりぞけるのである。もちろん、こうした考えは法然のそれを承けている。法然は、「一枚起請文」の中に、

念仏を信ぜん人は、たとひ一代の法をよくよく学すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のと  
もがらにおなじくして、智者のふるまひをせずして、ただ一向に念仏すべし。

『註釈版』一四二九頁

と、述べて、どれほどの学問を積んでも自らの愚かさを自覚して他の行や善には目もくれず、ひたすら念仏せよ、

という。

本鈔は仮名法語という性格上、民衆の疑問に答え、民衆を説得するという視点がある。専修念仏を勝れたものと説明しても、古くからの信仰形態や行を捨てることのできない人々がいる。そういう人への言葉である。

あるいは一乗をもたもち三密を行ずる人、おのおのその行を回向して浄土をねがはんとおもふ心をあらためず、念仏にならべてこれをつとむるになにのとかあらんとおもふなり。ただちに本願に順ぜる易行の念仏をつとめずして、なほ本願にえらばれし諸行をならべんことのよしなきなり。〔『註釈版』一三四三頁〕

と、述べて、雑修の人は千人のなかに一人も往生できず、専修の人は百人なら百人全員が往生する、と善導の言葉借りて説得する。

最後に、専修念仏について、法然と聖覚では微妙に違うと思われる点について触れておきたい。

『選択集』では、専修念仏はそのまま正行であるとし、雑修は即雑行であるとするのに対して、『唯信鈔』では、念仏往生をそのまま専修とせず、念仏往生の中に専修と雑修の二つの行があるとする。そもそも、往生の行相について、法然は、正行と雑行とに分けるのに対して、聖覚は諸行往生と念仏往生に分けている点から違っている。つまり、すでに上に引用したように、聖覚は、専修を「ただ念仏の一行をつとめてまったく余行をまじへざるなり。」「ただ弥陀の名号をとなへ、ひとへに弥陀一仏を念ずる、これを専修と名づく。」のだから、これ以外はすべて雑行とする。「弥陀一仏を念ず」であり、「どんな余行もまじえない」というのだから、法然のいう、正行すなわち五正行を修することを専修とするのとは違うということになり、聖覚の新しい展開とすることができる。

### 第三節 信心観

法然の信心の見方は、善導の三心積の強い影響を受けている。善導は、「古今を楷定す」と宣言して、『観無量寿経』（以下『観経』という）を釈義して、三心論を展開した。『観経』における三心の教えは短い部分であるが、善導は多くの部分を費やして三心を説いた。宗教生活あるいは信仰という面からみると、この三心、このころの問題に深く入り込んで説いたことは、浄土教の歴史にとつてきわめて重要なものとなった。

法然は、

善導の『観経の疏』はこれ西方の指南、行者の目足なり。・・・貧道昔この典を披閲して、ほぼ素意を識る。

立ちどころに余行を舍めて、ここに念仏に帰す。

（『七祖篇』一二九一頁）

と、述べて、「偏に善導一師に依る」と内面を吐露した。つまるところ、法然の三心論は、『観経疏』を中心とした三心の考えである。『選択集』「三心章」では、「念仏の行者、必ず三心を具足すべきの文」と標文し、善導の『観経疏』と『往生礼讃』の三心積をほとんど全文引いている。そして私積で「引くところの三心は、これ行者の至要なり、・・・一も少けぬればこれさらに不可なり。これによりて極樂に生まれんと欲はん人は、まつたく三心を具足すべし」（『同』一二四七頁）と三心必具を強調し、一心が欠けても往生は不可であることを明示している。

「三心章」によれば、法然の三心の定義付けは、至誠心は「真実心」、深心は「深信の心」、回向発願心は「別の積をまつべからず」とあつて、私積はない。聖覚は法然の積を承けて、次のように明快に言う。

ひとつには至誠心、これすなはち真実のころなり。・・・阿弥陀仏の、むかし菩薩の行をたて、浄土をもう



けたまひしも、ひとへにまことのころをおこしたまひき。これによりて、かのくにに生まれんとおもはんも、またまことのころをおこすべし。その真実心といふは、不真実のころをすて、真実のころをあらはすべし。

『註釈版』一三四六頁

と、述べて、三心の第一、至誠心を「真実のころ」であるとする。一切の衆生を救済しようと、浄土を建立した法蔵菩薩の願行はこの「真実のころ」から発したものであった。だから、浄土を願生する者は「真実のころ」を起こすべきであると説く。善導のいう至誠心は、「至とは真なり、誠とは実なり、一切衆生の身口意業所修の解行、かならずすべからく真実心のうちになすべきことを明かさんと欲す。」（『七祖篇』「散善義」四五五頁）であり、それを承けた法然は、「三心章」で、至誠心は真実心と定義している。

ついで、「外に堅善精進の相を現じて、内に虚仮を懐くことを得ざれ」という文を解釈している。真実のころとは、こころの中で思うことと、それをびつたりと外見にわかるように示すことである。つまり内外相応することである。「外に堅善精進」とは、内の愚悪懈怠の心と対応するのであり、外を翻して内に蓄えば出離の要道であることを説く。「内に虚仮を懐く」ということは、外の真実と対応することであり、内を翻して外にほどこさば出離の要道を満たすと解釈する。内外一致して、虚仮を捨て賢善精進の真実を成すべきを至誠心と説くのである。

聖覚もこの点では全く同じ道を進んだ。つまり、身口意の全ての業を通じて「真実のころ」を持たねばならないのである。言い換えれば、内外相応するをいう。「外相には世をいとふよしをもてなし、ほかには善心あり、とふときよしをあらはして、うちには不善のころあり、放逸のころもあるなり。」（『註釈版』一三四七頁）と

述べて、これを「虚仮のこころ」と名づけて批判する。親鸞はこの件りについて、『愚禿鈔』下で、

外に賢善精進の相を現ずることを得ざれ、内に虚仮を懐けばなり。  
〔註釈版〕五一七頁〕

と読んだ。通常は善導などが読んだように、「・・・内虚仮を懐くことを得ざれ。」と読むところである。したがって、親鸞は、内に不真実なるものを持っているからこそ、外見にその姿が現れないのであるとし、『唯信鈔文意』の中では「われらは善人にもあらず、賢人にもあらず」〔註釈版〕七一五頁〕と、「われら」という言葉でわかるとおり、自らの内面を懺悔して述べている。

三心の第二、深心について、善導は「深心といふは、すなはちこれ深信なり。」〔七祖篇〕「散善義」四五六頁〕と解釈した。「深く信ずる心」である。宗教の世界においては、いわば窮極の「こころ」である。信ずるところなく、どうして宗教心が語れようか。この点を善導が明らかにしたとすることができる。古今楷定の一つの表れである。これを承けた法然は「三心章」で、深心は「深信の心」であると定義している。また「生死の家には疑を以て所止となし、涅槃の城には信を以て能入となす。故に今二種の信心を建立して、九品の往生をする」〔七祖篇〕二四八頁〕との私釈がある。深心とは、深信であり、涅槃への因となることを示す。しかも二種の信心とあらかし、二種深信が中心であることが知られる。聖覚も次のように言う。

いまこの信心につきて二つあり。一つには、わが身は罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかた、つねに沈みつねに流転して、出離の縁あることなしと信ず。二つには、決定してふかく、阿弥陀仏の四十八願、衆生を撰取したまふことを疑はざれば、かの願力に乗りて、さだめて往生することを得と信ずるなり。

とあつて、信心について二種の信を説く。聖覚は、機に対する深信を、罪悪なる我が身が永久に出離することなく、流転してやまないものとしてとらえていて、法に対する深信については、このような罪悪深重の身であつても、わが身を救つてくださるといふ誓願を信すれば、必ず救つてくださるものであるとしている。つまり、この二種深信について、機の深信に深く誠めの意識を持つことで、法の深信がはたらくものようにとらえている点  
が特徴である。

聖覚は、「深心といふは、信心なり。まず信心の相をしるべし。信心といふは、深く人のことばをたのみて、うたがはざるなり。」(『同』一三四七頁)と述べて、以下に、唱導家らしくエピソードを挿入して信心とは何かについて力説する。深く信頼した人の言った言葉を、何千人が違うと言つても、信頼した人の言葉を信じるようなものであるとして、釈迦の教えや阿弥陀仏の誓願を信じるのも同じことである、と結んでいる。さらに、信心について、次のように具体例をあげながら言及する。あまりにわが身の愚かさを深く思うあまり、こんな自分を仏は救つて下さるのかと疑う人がいるが、「むなしく身を卑下し、こころを怯弱にして、仏智不思議を疑ふことなかれ。」と喝破して、「仏力を疑ひ、願力をたのみざる人は、菩提の岸にのぼることかたし」と主張する。それは、次の理由によるとたのみかける。

仏力無窮なり、罪障深重の身をおもしとせず、仏智無辺なり、散乱放逸のものをもすつることなし。信心を要とす、そのほかをばかへりみざるなり。

とあつて、信心こそ念仏往生の根本であるといふのである。まさに「唯信」である。

第三の回向発願心については、自己が過去から現代にわたつて行じた身口意三業の善根を浄土にまわして往生を願う心といふのであるとしてゐる。<sup>20</sup>

以上、この三心はもつぱら『観経』にいう三心であつて、『大経』の三心については全く触れていない。したがつて、『観察』の三心と『大経』のそれとの関係は不明である。これら、至誠心、深心、回向発願心のそれぞれの関係は、

信心決定しぬれば、三心おのづからそなはる。本願を信ずることまことなれば、虚仮のころなし。浄土まつこと疑なければ、回向のおもひあり。このゆゑに三心ことなるに似たれども、みな信心にそなはれるなり。

（『同』一三四九頁）

というように、三心は信心（深心）に集約されるとする。つまり、すべては「深心（信心）」に帰する、と結んでゐる。信心こそ全ての衆生が救われる核心であるとするのである。だから、この結論を導くために、信心とは何かについて、丁寧に解説してゐたわけである。

## 結論

『唯信鈔』の思想は、本願観、念仏観、信心観において、法然の専修念仏の考えを引き継いだものであつた。それは、法然の死後、「専修念仏」の継承は、必ずしも順調にはすすまなかつた状況の中で、<sup>21</sup>法然の教えを正しく

伝えようとして、『選択集』を基本とした「専修念仏」の要点を、和語で明らかにしたのである。和語で明らかにした（和語法語にした）のは、明らかに、僧や学問ある人たち向けではなく、民衆向けに分かりやすく書いたものである。

親鸞がなぜあれほどまでに『唯信鈔』を重宝したのであるか。あらためて考えてみたい。第一は、親鸞が師と仰ぐ法然の『選択集』の要点をまとめたものだからである。「よきひとの仰せをかぶりて信ずるほかに別の子細なきなり」とまで信頼しきっていた法然の主著を、かくも分かりやすく解説したものだ、感心したにちがいない。第二は、「唯信」に徹した内容であるということである。念仏往生の根幹は、ただひたすら阿弥陀仏一仏に信順し、称名念仏、他力念仏に身をまかせること、この点に終始言及したことに共鳴したのである。第三は、本願観についてである。第十七願に注目した聖覚の考え方に、目を見張ったにちがいない。法然もある程度の意識で第十七願をみていたが、第十八願とのつながりに大きな意味を見い出せていなかった。そこを聖覚はきっぱりと主張したので、親鸞にとって学ぶところがあつたのではないかと思う。第四は、和語による説法書という点である。和語によって述べられていることの共鳴度は非常に高いものがあつたのではないかと思う。それは、まず、親鸞自身が漢文の読み書きのなかに集中していて、仮名法語をものすることがなかったせいで、この仮名法語は実に新鮮に見えたのである。『横川法語』などはあつたであろうが、本命は、漢文の『往生要集』であり、『選択集』である。同時に書きつづけていた『教行信証』であつた。そこに、和語の『唯信鈔』が出現した。東国の門弟たちのあいだに迷いが生じたときに、その信心を正しく伝えるツールとして、きわめて便利であつた。それは、

『唯信鈔』に較べて、多少見劣りのする『一念多念分別事』や『自力他力事』『後世物語聞書』なども、門弟たちに勧めている親鸞の態度からうかがわれる。そういう意味では、『唯信鈔』は初期のすぐれた伝道書という位置づけもできる。この点について、深川宣暢氏の論がある。<sup>2)</sup> また、『唯信鈔』に引用されている漢文を、親鸞自らが分かりやすく仮名法語（聖教）にして世に出していることから考えられる。以上が、親鸞が『唯信鈔』に共鳴した点である。

次に、聖覚はどのような執筆意図で『唯信鈔』を書いたのだろうか。結びの部分で、

念仏の要義おほしといえども、略してのぶることかくのごとし。

（『註釈版』一三五六頁）

と記している。執筆意図が明確に示されている。つまり、専修念仏の要義を明らかにしようとしたのである。師の法然の死後、念仏要義がさまざまに解釈されてくる中で、正しい法然の教えを世に出したかったのである。

『唯信鈔』における聖覚の考えをみてきたが、それが、親鸞にどのように受け継がれたのか、といった教理史的な追究が全くできていない。今後の研究課題としたい。また、今後の課題として、仮名法語の研究が浮かび上がってきた。仮名法語については、「説教文学」「唱導文学」としての学問が活発であり、説教、伝道といった観点からはまだまだ研究の余地があるように感じたからである。

【註】

- 1 『親鸞聖人御消息集』には、以下のように、『唯信鈔』を勧めている箇所がある。① 『唯信鈔』・『自力他力の文』・・・これらを御覧しながら（『註釈版』七五二頁）、② 『唯信鈔』・『後世物語』などを御覧あるべく候ふ。（同 七七四頁）、③ 『唯信鈔』・『後世物語』・『自力他力』、この御ふみどもをよくよくつねにみて、その御ころにたがへずおはしますべし。（同七七五頁）、④ 『唯信鈔』・『後世物語』・『自力他力の文』のころども、二河の譬喩など書きて、かたがたへ、ひとびとにくだして候ふも（同七九六頁）、⑤ 「よくよく『唯信鈔』を御覧候ふべし。」（同八〇六頁）など、その推奨ぶりがうかがえる。
- 2 ここでいう「よきひと（びと）」とは、『歎異抄』第二章でいう「よきひと」つまり、「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまゐらすべしと、よきひとの仰せをかぶりて信ずるほかに別の子細なきなり。」（『註釈版』八三二頁）というそれである。法然から教えられた専修念仏、ひたすら弥陀の誓願におまかせする信心の方向を間違いないく伝えていく聖覚と隆寛を「よきひとびと」と言っているのである。
- 3 信西は、後白河法皇の側近として知られ、平清盛と組んで、平治の乱に敗れて自害したが、その政治力は大きなものだった。
- 4 『明月記』には、聖覚がさまざまな法要に出仕していることが記されている。法性寺（九条兼実）をはじめ、美福門院、藤原定家のきょうだいといった個人の法要から、朝廷、仁和寺での法要など、さまざまなか所で僧侶として活躍していることがわかる。役割も、導師、講師、読師、唄師などにあたっている。『明月記』には、

聖覚は二十八回登場している日を確認した。

5 六角堂ノ焼失ノ時、彼勸進ノ為ニ、日々ニ説法アリケリ。聖覚ノ説法セラレケル日、殊ニ聴衆ヲホカリケル中ニ  
〔日本古典学大系〕八五卷「沙石集」二六七頁。

6 高野ニテ御供養アリケルニ、折節聖覚法印、高野ニ参籠ノ便宜ナリケレバ廿余座ノ供養アリケル中ニ、殊に、  
三座耳目ヲ驚カス説法アリケリ。  
〔同二八二頁〕。

7 上人ツネニノタマヒケルハ、吾ガ後ニ、念仏往生ノ義スクニイハムスル人ハ、聖覚ト隆寛トナリ。

〔明義進行集〕卷第三の七

8 『親鸞聖人正明伝』には、二十九歳、建仁元年辛酉、叡南ノ大乘院ニカクレ、大誓願ヲ発シ、京都六角精舎如意輪観音ニ一百ノ参籠アリ、サシモケハシキ赤山超ヲ毎日ユキカヘリ、イカナル風雨ニモ怠ナク、雪霜ヲモイトハセタマハズ、誠ニアリガタキ御懇情ナリ、是精誠シルシアリテ、計ラザルニ安居院聖覚法印ニ逢ヒテ、源空上人ノ高德ヲ聞キ、ワタリニ船ヲ得タルココロシテ、遂に古水禅坊ニ尋ネ参リタマヒケリ。〔真宗全書〕二九九頁）とあり、『親鸞聖人正統伝』には、「三月中旬、四条橋ニテ、計ラザルニ安居院聖覚法印ニ行き逢ヒタマフ、法印詞ヲカケテ云ク、常ナラヌ有様ニ見エ侍ベリ、何処ヘカ行カセタマフト、範宴モトヨリ教示ノ親ミアレバ必底ヲ残ラズカタリ給フ、法印ソレコソ、期サンメレ、今東山吉水ニ、法然房源空聖マシマス、実ニ一天ノ明匠、四海ノ導師也、早く、彼ノ許ニ詣デ、要津ヲ問タマヘ、我モ此頃、ソノ教化ヲ受ケ、今日モ参ト申サル、」とある。〔真宗全書〕三四六頁）



9 「……臨終のときにいたりて、はじめて善知識のすすめによりて、わづかに十返の名号をとなへて、すなはち浄土に生る」といへり。これさらにしづかに觀じ、ふかく念ずるにあらず、ただ口に名号を称するなり。

「汝若不能念」といへり。これふかくおもはざるむねをあらはすなり。「応称無量寿仏」と説けり。ただあさく（ふかく）仏号をとなふべしとすすむるなり。

〔註釈版〕一三五〇頁

10 『選択集』…しばらく浄土教について略して二門をあかさば、日取るには聖道門、二つには浄土門なり。はじめに聖道門といふは、これについて二あり。一つには大乘、蓋湯には小乗なり。（中略）聖道・浄土の二門をたつる意は聖道を捨てて浄土門に入らしめんがためなり。これについて二の由あり。一つには大聖を去ること遙遠なるによる。二つには理深く解微なるによる。〔七祖篇〕（一一八六〜一一八八頁）

『唯信鈔』…それ、生死をはなれ仏道をならんとおもはんには、二つの道あるべし。一つには聖道門、二つには浄土門なり。聖道門といふは、この娑婆世界にありて、行をたて功をつみて、今生に証をとらんとはげむなり。（中略）二つに浄土門といふは、今生の行業を回向して、順次生に浄土に生まれて、浄土にして菩薩の行を具足して仏に成らんと願ずるなり。この門は末代の機にかなえり。まことにたくみなりとす。

〔註釈版〕一三三七〜一三三八頁

11 「仮名法語集」には、具体的な仮名法語は、浄土教関係では『横川法語』『一枚起請文』『一言放談』『真言関係では『覺海法橋法語』『道範消息』『真言内証義』『華嚴系では『梅尾明恵上人遺訓』『時宗の『一遍上人語録』、臨濟宗の『妻鏡』、曹洞宗の『正法眼藏』などが取り上げてある。

12 当時の女性が漢文ではなく、仮名で書いたことは、『土佐日記』（紀貫之）の冒頭にその様子がうかがわれる。それは、「をどこもすなる日記といふものを、おむなもしてみんとてするなり。」（『日本古典文学大系』第二〇二七頁）である。男である紀貫之（八六八ころ〜九四五）が、本来の漢文ではなく、平仮名（漢字交じり）で日記を書いたものだが、わざわざ「女になりすます」ことによつて、実現させたのである。男は漢文、女は平仮名というのが当時の表記基準であつたことを裏付ける資料である。

13 『歎異抄』第十三章に『唯信鈔』にも、弥陀、いかばかりのちからましますとしりてか、罪業の身なれば、すくはれがたしとおもふべき」と候ふぞかし。（『註釈版』八四四頁）とある。これは、凡夫である私たちは、ついつい悪業をしてしまうが、それはそうなるべき業縁によるのであつて、どうにもならないことであり、ただひたすら本願をたのみしか手だてがないという文脈の中で引用されている。つまり、他力の大切さを補強するための引用である。この『歎異抄』の中で、親鸞以外に聖覚の文をわざわざ引用するところから、筆者は、親鸞の教えを忠実に承けつつ、聖覚の『唯信鈔』にも深く影響を受けていたと考えられる。

14 次のように文章がつづく。

仏力を疑ひ、願力をたのまざる人は、菩提の岸にのぼることかたし。ただ信心の手をのべて誓願の綱をとるべし。仏力無窮なり、罪障深重の身をおもしとせず。仏智無辺なり、散乱放逸のものをもすつることなし。信心を要とす、そのほかをばかへりみざるなり。信心決定しぬれば、三心おのづからそなはる。本願を信ずることまことなれば、虚仮のこころなし。浄土疑なければ、回向のおもひあり。このゆゑに三心異なるに似たれ

ども、皆信心にそなはれり。」

『註釈版』一三四九頁

と、実に見事な展開である。至誠心、深心、回向発願心という三つの心は、別々のようでありながら、結局は深い心（信心）に収斂されていくことを、短いセンテンスを重ねて、たたみかけるように理路整然と述べていく。この表現手法は、現代の私たちにも学ぶべきものがある。

15 「登山状」に次のように述べられている。

ねがはくはわれ十方諸仏に、ことごとくこの願を称揚せられたてまつらんとちかひて、第十七の願に「設我得仏 十方無量諸仏 不悉咨嗟称我名者 不取正覚」とたてたまひて、つぎに第十八願の「乃至十念 若不生者 不取正覚」とたてたまへり。そのむね、無量の諸仏の称揚せられたてまつりらんとたてたまへり。願成就するゆへに、六方におのおの恒河沙のほとけましまして、広長舌相を出して、あまねく三千大世界におほひて、みなおなじくこのことをまことなりと証誠したまへり。 (『法然上人全集』四二八頁)

とあつて、第十七願の諸仏が阿弥陀仏を称揚する諸仏称名の意義を認めており、その方向の視点を持っていたことは確かである。しかし、すでに述べたように、聖覚の第十七願に対する思いには及ばない。

16 『論註』に「このなかに念といふはこの時節を取らず。ただ阿弥陀仏を憶念するをいふ。もしは総相、もしは別相、所観の縁に随ひて、心に他想なくして十念相続するを名づけて十念となす。 (『七祖篇』九八頁) とある。

17 善導は、大胆に本願の文を取意して「十方の衆生、我が国に生ぜんと願じて、我が名字を称せんこと、下十

声まに至るまで」(『七祖篇』六三〇頁)、「十方の衆生、我が名号を称して、我が国に生まれんと願ぜん」(『七祖篇』「玄義分」)と述べている。善導は、第十八願の誓いを「我が名を称せよ」という称名念仏の誓願として解釈したのである。

18 いわゆる「三選之文」:「それすみやかに生死を離れんと欲はば、二種の勝法のなかに、しばらく聖道門を闊きて選びて浄土門に入るべし。浄土門に入らんと欲はば、正雑二行のなかに、しばらくもろもろの雑行を抛てて選びて正行に帰すべし。正行を修せんと欲はば、正助二業のなかに、なほ助業を傍らにして選びて正定をもつばらにすべし。」(『選択集』一一八五頁)

19 次のように言う。

諸行往生といふは、あるいは父母の孝養し、あるいは師長に奉事し、あるいは五戒・八戒をたもち、あるいは布施・忍辱を行じ、乃至、三密・一乗の行をめぐらして、浄土に往生せんとねがふなり。これみな往生をとげざるにあらず。(『註釈版』一三三九頁)

20 次のように述べるだけである。「回向発願心といふは、名のなかにその義きこえたり。くはしくこれをのぶべからず。過現三業の善根をめぐらして、極楽に生れんと願するなり。」(『註釈版』一三五〇頁)

21 法然の死後、その弟子たちの間に、多念か一念か、臨終念仏か否かなどの論争があり、色々な派に別れた。

22 深川宣暢氏の論文「唱導家・聖覚と親鸞」(『浄土教思想の研究』龍谷大学真宗学会二〇〇四年)に、次のよ

うにある。「(松野氏は)何故親鸞が『唯信鈔』を高く評価したのかという理由について、それが法然の精要をよく伝えた平易な談義本的略述書であって、しかも法然の正統な思想がたくみに織り込まれ、当時の異義に対処するために適切な書であったという利用価値の面からみるべきであろうとされるのである。いずれにしても、聖覚の『唯信鈔』を以上のように見ることができるとすれば、この『唯信鈔』および聖覚は、真宗における唱導、説教、伝道の源に位置づけられるものということではできるようである。」(二三五頁)

【参考文献】

- 『浄土真宗聖典』（註釈版）本願寺出版 二〇〇九年
- 『浄土真宗聖典』（七祖篇）本願寺出版 二〇〇八年
- 『浄土真宗聖典全書二』（浄真全二）本願寺出版 二〇二一年
- 『真宗全書』妻木直良編 図書刊行会 大正三年（一九一三）
- 『聖覚法印の研究』藤枝昌道 顕真学苑出版部 昭和七年（一九三二）
- 『法然上人全集』浄土宗務所 昭和三〇年（一九七五）
- 『日本古典文学大系』八三卷「仮名法語」宮坂宥勝校注 岩波書店 昭和四三年（一九六八）
- 『親鸞―その生涯と思想の展開過程』松野純孝 三省堂 昭和四八（一九六三）
- 『定本親鸞聖人全集 写伝篇』卷六 親鸞聖人全集刊行会 法蔵館 昭和四九年（一九七四）
- 『明義進行集』（仏教古典叢書 江藤激英編 図書刊行会 昭和五九年（一九八四）
- 『唯信鈔文意に聞く』小端静順 教育新潮社 平成一一年（一九九九）
- 『法然と親鸞』浅井成海編 永田文昌堂 二〇〇三年
- 『唯信鈔講義』安富信哉 大法輪閣 平成一九年（二〇〇七）
- 『浄土教入門』浅井成海 本願寺出版 二〇〇七年
- 『唯信鈔文意講読』安藤光慈 永田文昌堂 平成二三年（二〇一一）
- 『唯信鈔文意講義』田代俊孝 法蔵館 二〇二二年

- 『選択集講座』藤堂泰峻 浄土宗出版 平成二四年（二〇一三）
- 『選択本願念仏集』武田正晋 永田文昌堂 平成二五年（二〇一三）
- 「聖覚法印と親鸞聖人」浅野教信（『真宗研究』一九六一年）
- 「聖覚における信の思想」信楽峻磨（『真宗学』五〇号 一九七四年）
- 「聖覚を中心としたる親鸞と法然」松本彦次郎（『親鸞大系』第一卷 法蔵館 平成元年（一九八九）
- 「唱導家・聖覚と親鸞」深川宣暢（『浄土教思想の研究』龍谷大学真宗学会 二〇〇四年）
- 「聖覚の『唯信鈔』と親鸞」（『親鸞の生涯と思想』平松令三 吉川弘文館 二〇〇五年）

1 『親鸞聖人御消息集』には、以下のように、『唯信鈔』を勧めている箇所がある。「『唯信鈔』・『自力他力の文』……これらを御覧しながら」（『註釈版』七五二頁）、『唯信鈔』・『後世物語』などを御覧あるべく候ふ。「（同七七四頁）、『唯信鈔』・『後世物語』・『自力他力』、この御ふみどもをよくよくつねにみて、その御こころにたがへずおはしますべし。」（同七七五頁）、『唯信鈔』・『後世物語』・『自力他力の文』のこころども、二河の譬喩など書きて、かたがたへ、ひとびとにくだして候ふも」（同七九六頁）、「よくよく『唯信鈔』を御覧候ふべし。」（同八〇六頁）など、その推奨ぶりがうかがえる。

2 ここである「よきひと（びと）」とは、『歎異抄』第二章である「よきひと」つまり、「親鸞におきては、ただ



念仏して弥陀にたすけられまゐらすべしと、よきひとの仰せをかぶりて信ずるほかに別の子細なきなり。」(『註釈版』八三二頁) というそれである。「ゆゆしき学生たち」ではなく、法然から教えられた専修念仏、ひたすら弥陀の誓願におまかせする信心の方向を間違ひなく伝えていく聖覚と隆寛を「よきひとびと」と言っているのである。

3

4

5 六角堂ノ焼失ノ時、彼勸進ノ為ニ、日々ニ説法アリケリ。聖覚ノ説法セラレケル日、殊ニ聴衆ヲホカリケル中ニ  
『沙石集』二六七頁 『日本古典学大系』八五巻 頁)。

6 高野ニテ御供養アリケルニ、折節聖覚法印、高野ニ参籠ノ便宜ナリケレバ廿余座ノ供 養アリケル中ニ、殊に、三座耳目ヲ驚カス説法アリケリ。  
(同二八二頁)。

7 上人ツネニノタマヒケルハ、吾ガ後ニ、念仏往生ノ義スクニイハムスル人(直ぐに「正しく」言うであろう人)ハ、聖覚ト隆寛トナリ。  
(『明義進行集』巻第三の七)

8 二十九歳、建仁元年辛酉、叡南ノ大乘院ニカクレ、大誓願ヲ発シ、京都六角精舎如意輪観音ニ一百ノ参籠アリ、サシモケハシキ赤山超ヲ毎日ユキカヘリ、イカナル風雨ニモ怠ナク、雪霜ヲモイトハセタマハズ、誠ニアリガタキ御懇情ナリ、是精誠シルシアリテ、計ラザルニ安居院聖覚法印ニ逢ヒテ、源空上人ノ高德ヲ聞キ、ワタリニ船ヲ得タルココロシテ、遂に吉水禅坊ニ尋ネ参リタマヒケリ。(真宗全書『親鸞聖人正明伝下』二九九頁)

三月中旬、四条橋ニテ、計ラザルニ安居院聖覚法印ニ行キ逢ヒタマフ、法印詞ヲカケテ云ク、常ナラヌ有様ニ見エ侍ベリ、何処ヘカ行カセタマフト、範宴モトヨリ教示ノ親ミアレバ必底ヲ残ラズカタリ給フ、法印ソレコソ、期サンメレ、今東山吉水ニ、法然房源空聖マシマス、実ニ一天ノ明匠、四海ノ導師也、早く、彼ノ許ニ詣テ、要津ヲ問タマヘ、我モ此頃、ソノ教化ヲ受ケ、今日モ参ト申サル、(真宗全書『親鸞聖人正統伝二』三四六頁)

9 「……臨終のときにいたりて、はじめて善知識のすすめによりて、わづかに十返の名号をとなへて、すなはち浄土に生る」といへり。これさらにしづかに観じ、ふかく念ずるにあらず、ただ口に名号を称するなり。「汝若不能念」といへり。これふかくおもはざるむねをあらはすなり。「応称無量寿仏」と説けり。ただあさく(ふかく)仏号をとなふべしとすすむるなり。

『註釈版』一三五〇頁)

しばらく浄土教について略して二門をあかさば、それ、生死をはなれ仏道をならんとおもはんに、二つの日取るには聖道門、二つには浄土門なり。はじめ道あるべし。一つには聖道門、二つには浄土門なり。聖に聖道門といふは、これについて二あり。一つに道門といふは、この娑婆世界にありて、行をたて功をつ

は大乗、蓋湯には小乗なり。(中略)

みて、今生に証をとらんはげむなり。(中略)

聖道・浄土の二問をたつる意は聖道を捨てて浄土二つに浄土門といふは、今生の行業を回向して、順次生門に入らしけんがためなり。これについて二の由に浄土に生まれて、浄土にして菩薩の行を具足して仏にあり。一つには大聖を去ると遙遠なるによる。二成らんと願するなり。この門は末代の機にかなえり。ま

つには理深く解微なるによる。

ことにたくみなりとす。

『註釈版七祖篇』(一一八六〜一一八八頁)

『註釈版』一三三七〜一三三八頁)

1 2 1 1  
当時の女性が漢文表記ではなく、仮名表記だったことは、『土佐日記』(紀貫之)の冒頭にその様子がかが

われる。それは、「をとこもすなる日記といふものを、おむなもしてみんとてするなり。」(『岩波古典文学大系』

頁)である。男である紀貫之(八六八ころ〜九四五)が、本来の漢文ではなく、平仮名(漢字交じり)で日記を書いたものだが、わざわざ「女になります」ことによって、実現させたのである。男は漢文、女は平仮名と

というのが当時の表記基準であったことを裏付ける資料である。

1 4 1 3

仏力を疑ひ、願力をたのまざる人は、菩提の岸にのぼることかたし。ただ信心の手をのべて誓願の綱をとるべし。仏力無窮なり、罪障深重の身をおもしとせず。仏智無辺なり、散乱放逸のものをもすつることなし。信心を要とす、そのほかをばかへりみざるなり。信心決定しぬれば、三心おのづからそなはる。本願を信ずることまことなれば、虚仮のころなし。浄土疑なければ、回向のおもひあり。このゆゑに三心異なるに似たれども、皆信心にそなはれり。

『註釈版』一三四九頁

と、実に見事な展開である。至誠心、深心、回向発願心という三つの心は、別々のようでありながら、結局は深い心（信心）に収斂されていくことを、短いセンテンスを重ねて、たたみかけるように理路整然と述べていく。この手法は、現代の私たちにも学ぶべきものがある。

1 5

ねがはくはわれ十方諸仏に、ことごとくこの願を称揚せられたてまつらんとちかひて、第十七の願に「設我得仏 十方無量諸仏 不悉咨嗟称我名者 不取正覚」とたてたまひて、つぎに第十八願の「乃至十念 若不生者 不取正覚」とたてたまへり。そのむね、無量の諸仏の称揚せられたてまつりらんとたてたまへり。願成就するゆへに、六方におのおの恒河沙のほとけましまして、広長舌相を出して、あまねく三千大世界に

おほひて、みなおなじくこのことをまことなりと証誠したまへり。

〔同〕四二八頁

とあつて、第十七願の諸仏が阿弥陀仏を称揚する諸仏称名の意義を認めており、その方向の視点を持っていたことは確かである。しかし、すでに述べたように、聖覚の第十七願に対する思いには及ばない。

16 このなかに念といふはこの時節を取らず。ただ阿弥陀仏を憶念するをいふ。もしは総相、もしは別相、所觀の縁に随ひて、心に他想なくして十念相續するを名づけて十念となす。〔七祖篇〕九八頁

17 大胆に本願の文を取意して「十方の衆生、我が国に生ぜん」と願じて、我が名字を称せんこと、下十声まに至るまで」〔七祖篇〕六三〇頁）、「十方の衆生、我が名号を称して、我が国に生まれんと願ぜん」〔七祖篇〕「玄義分」と述べている。善導は、第十八願の誓いを「我が名を称せよ」という称名念仏の誓願として解釈したのである。

18 聖道門は闕き、浄土門を選び、浄土門において雑行を抛つて正行を選ぶのである。

19 諸行とは、「父母に孝養」し、「師長に奉事」し、「五戒・八戒」を守り、「布施・忍辱」をし、「三密・一乗」を行じることであつて、これらによつて往生を遂げないことはないが、

20 回向発願心といふは、名のなかのその義きこえたり。くはしくこれをのぶべからず。過現三業の善根をめぐ

2 2 2 1

らして、  
極楽に生れんと願ずるなり。

『同』  
一三五〇頁